釣道楽

下の巻

村井弦斎著　村井米子編

新人物往来社

釣道楽

下の巻

村井弦斎著
村井米子編

新人物往来社

釣道楽　下の巻

昭和五十二年十月三十日　第一刷発行

著　者＝村井弦斎
編　者＝村井米子

発行者＝菅　英志
発行所＝株式会社　新人物往来社
東京都千代田区丸の内三―三―一新東京ビル〒一〇〇
電話東京二一二―三九三一（代表）振替東京六―一五一六四三
印刷＝明邦印刷
製本＝大観社
落丁本・乱丁本はおとりかえいたします

釣道楽 下の巻▨目次

下の巻

二二 二つの力 一〇
二三 鯨 一一
二三 大魚 一三
二四 おすそわけ 一五
二五 推測 一七
二六 ご相談 一九
二七 月下の会 二〇
二八 我が望み 二三
二九 親心 二四
三〇 隔てぬ仲 二五
三一 武山行き 二七
三二 秋の野 二九
三三 鰯のハミ 三一
三四 海水旅館 三三
三五 禽獣紳士 三五
三六 俗人の遊び 三六
三七 根掘り葉掘り 三八
三八 久里浜の噂 四〇
三九 逃げ支度 四一
三〇 大人心 四三
三一 そんな人 四五
三二 蓄妾会 四七
三三 初対面 四八
三四 這々の体 五〇
三五 忤の嫁 五二
三六 漫太郎 五三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

一三七　気楽息子　五五
一三八　母の道連れ　五七
一三九　出会い　五九
一四〇　不体裁　六〇
一四一　悪い辻占　六二
一四二　家庭の風　六四
一四三　痛き耳　六五
一四四　不相応　六七
一四五　悔悟の念　六九
一四六　身の程　七〇
一四七　昔の友　七二
一四八　庭見物　七四
一四九　無知識　七六
一五〇　忌味な人　七七
一五一　内相談　七九
一五二　昔の友　八一
一五三　彼の嫁　八二
一五四　承諾　八四
一五五　身支度　八六
一五六　平生のまま　八八
一五七　初心男　八九
一五八　質問の矢　九一
一五九　日記調べ　九三
一六〇　生まれ変わり　九五
一六一　真人間　九六
一六二　ご面会　九八
一六三　別な人　一〇〇
一六四　舟の稽古　一〇二
一六五　仁王様　一〇四
一六六　漁師姿　一〇五

一六七 台湾踊り 一〇七
一六八 慙愧の体 一〇九
一六九 自分船頭 一一〇
一七〇 朝景色 一一三
一七一 海の幸 一一四
一七二 鰯物語 一一五
一七三 子の意見 一一七
一七四 砂滑 一一九
一七五 新事業 一二一
一七六 伝染病 一二三
一七七 大賛成 一二四
一七八 不賛成 一二六
一七九 危険の度 一二八
一八〇 出帆 一三〇
一八一 心の楽しみ 一三一
一八二 世間の人 一三三
一八三 言いがかり 一三五
一八四 恩を讐 一三六
一八五 活計の道 一三八
一八六 きせた恩 一四〇
一八七 むとんちゃく 一四二
一八八 工場の内 一四三
一八九 浮いた心 一四五
一九〇 情愛 一四七
一九一 親子げんか 一四八
一九二 後生願い 一五〇
一九三 親のしつけ 一五二
一九四 遠心力 一五四
一九五 ぜんの上 一五五
一九六 浦賀行き 一五七

一九七 大愉快 一五九
一九八 新世帯 一六一
一九九 日曜日 一六三
二〇〇 おか釣り 一六四
二〇一 釣り見物 一六六
二〇二 魚笭の中 一六八
二〇三 ばくれん女 一六九
二〇四 出会い 一七一
二〇五 ご無心 一七三
二〇六 お土産 一七五
二〇七 気まま気ずい 一七六
二〇八 身の運命 一七八
二〇九 人の分限 一八〇
二一〇 弟の子 一八二
二一一 疑心 一八四
二一二 嫉妬 一八六
二一三 女房のうわさ 一八八
二一四 好機会 一八九
二一五 捜索汽船 一九一
二一六 家の破滅 一九三
二一七 心の憂い 一九五
二一八 人と禽獣 一九六
二一九 恋愛の害 一九八
二二〇 大吉報 二〇〇

弦斎自身の釣道楽の想い出　村井米子

釣道楽 下の巻

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

下の巻

一一一　二つの力

鱗次郎「感情のうえから言うと、とても再び得られません。私には天下にあの子ほど可愛いものがないのです。これからさき百年生きても二百年生きても、あの子より可愛い人があろうとは思いません。実際、決してありますまい」。隠居「してみると、浪子さんでなければ妻にしようという心も起こりますまい。あなたは生涯ご独身のおつもりですか」。鱗次郎「いいえ、独身ではおりません。結婚すべき時期がくれば妻を持ちます、それも動物学上の理由があるので。何の動物でも体は二つの力から成り立っています。すなわち生活力と生殖力で、一方に向かっては生活していくと同時に、一方に向かっては子孫を繁殖するのが動物の二大事業です。人類もその通り、私の体は親から受けたものですが、いかなる体をうけたかというと、この世に生活すべき体と子孫を繁殖すべき体と二つの力をうけているのです。よく世間に独身生涯を守るという人がありますけれども、あれは天然の能力を廃するので、人類の事業を成し遂げないのです。まして人類は下等動物のように子孫を殖やしたばかりですみません。それを養育して立派な人類を世界に供給すべき天職があります。そういうわけで私は必ず結婚致すつもりです」と、いちいちその理屈がある。

隠居「それではどんな人をお貰いになりますか」。鱗次郎「それはわかりません。誰を貰うという心当たりもありません」。隠居「今お貰いなさらんでも、今のうちに約束をして何年の後に婚礼するときめておいてもいいでしょう。五年の後でも十年の後でも構いませんが、約束をきめておくとお互いに勉強の励みにもなりましょう。それにあなたのご精神がその通り川沼さんに通じていればようございますが、さもないと向こうでは今にもあなたのお心が変わって以前のように戻ってくるだろうと待っておいでなさるかもしれません。そうすればやっぱりあなたのご迷惑、川沼さんにも他日の

失望を招かせるわけで、これもご迷惑。それを防ぐにはあなたが到底川沼家へ再帰しない、浪子さんとも夫婦にならない、自分はほかの人と婚礼の約束をした、どこまでも独立で身を立てるとこういう証拠を見せて、すっかりあなたのことを諦めさせるのが一番でしょう。今のようにしていると川沼さんの人々は蛇の生殺しのような目にあって、いつまでもあなたに釣られるようなわけです。あなたも決して快くはありますまい」。鱗次郎「いかにもそれが心苦しいので、私の精神をよく川沼家の人に知らせたいと思うのです」。隠居「口でばかり話しても無駄ですよ、あなたの精神は以前静岡をお出なすったときにわかっているはずです。今でもわかったつもりで川沼さんはあなたを他人らしく取り扱っておいでです。それが内々あなたを当てになさるのは、あなたの心が変わるだろうと待っておいでだからです。あなたがほかの人と婚礼するとかあるいはその約束をするとか、たしかに証拠を見なければとても向こうであなたのことをご断念なさいませんよ」。鱗次郎「そうでしょうかね、しかし私は誰と婚礼の約束をするのという当てもありません。また今からそんな問題を考える気もありません」。隠居「お気がなくっても必要があるので、どうでしょう、私の口からそう言ってはおかしゅうございますが、あの清江を貰ってくださらんか、せめて約束だけでも」と、思い切って言い出した。

鱗次郎は「え」と驚いたようである。そのとき忽ち船のかなたにこつぜんと水音がして、浮かび出した鯨が一頭。舟人が驚き慌てて頻りに舷（ふなばた）を板で打ち叩いた。

一一二　鯨

鯨はうしろから奔湍のごとく水を噴いてその壮観は凄（すさ）まじく見えたが、舟人の板を叩く音が激しいためか、暫くして悠然と水中に沈んでしまった。あとに残る大波紋が渦をなして舟を打った。落々たる乾坤（けんこん）、今は一層の凄味を添えた。舟人はホッと息をつき、「おお怖かった」と胸を撫でおろす。鱗次

郎はその快なるを見てその恐ろしさを知らず、「鯨がそんなに怖いかね」。舟人「怖いのナンの、東海やキンノウという大きな舟でさえ鯨の尾鰭でひっくり返されるくらいです。こんな小舟の側へきて一煽りやられてはたまりません。この海で恐いのは鯨と恵比寿鮫で、その鮫はわざと舟の底へ背中をつけて浮き出しますから舟が覆されるのです。鮫は鰹を追ってくるし、鯨は鰯を追って来ます。今の鯨は観音崎の中へまではいりましょう。あれあすこへ浮きました、鴨居の沖へ」と指さす方を望めば、波間に見える黒い背から一筋の奔泉が高くあがった。

鱗次郎はこの光景に対して心胸の爽然たるを覚え、「愉快だな、じつに愉快、この辺ではあの鯨を獲らんのかな」。舟人「房州の加知山に鯨取りの漁師がおりますけれども、大概大島へ行って獲りますからこっちにはいません。この辺の鯨はツチ鯨といって口が尖っていて、たいそう深く海の底へ潜るので綱が要ってたまりません」。鱗次郎「そうかね、ああいう大きなものを見るとじつに愉快だ。もしご隠居さん、鯨などを見ては黒鯛だの鱸だのと小さなものを釣るのは面白くありませんね、何か大きなものを釣ってみとうございますが、この近所に鮪か鮫の釣れる場所はありませんかな」。隠居「鮪釣りは面白いと聞いていたが、まだ一度も行ったことがありません。三浦三崎の沖へ行けば釣れるそうです」。舟人は口を添え、「あの辺では大きな鮪も大きな鮫もたくさん釣れますが、素人には危なくってとてもできません。漁師が釣るのを見物なさるのが面白うございます。この頃三崎へ行くと毎朝、鮪釣りの舟が青竹に笹のついたのをたくさん積んで出て行きます。その竹は浮きにするので、竹から釣糸をさげて何本も海へ浮かしておくと、鮪が餌を食ったとき水の中へ引き込むから横になっている竹がまっすぐに立って遠方から見えます。ソレかかったというので舟が駆けて行って引き揚げるのです。そのほかに手釣りをすることもありますが、これはいちばんむずかしいので舟から釣糸をさげて魚がかかれば漁師は手で合わせます。いったん合わせて糸を伸ばすとき腕でもからめると、その

まま海へ引き込まれます。大鮪の力はえらいもので、向こうを向いて逃げるときはどんな大力な男でも糸を持っておられません。舟ごと一緒に引っ張られます。相摸灘の大根といって烏帽子岩のある磯の根へ鮪がつくと手釣りでよく釣れます。話の種に一度行ってご覧なさい。なに鮪の餌ですか、餌には鰯か烏賊をつかいます。鮪の釣れる時分に、きっとその餌が小さいので三浦三崎へ行くと鰯で一尾二十銭したり、烏賊が三十銭したりすることも毎度あります。東京のお方はお驚きになりますが、鮪の餌にするから高いのです」。鱗次郎「なるほどそのわけだ、鰯や烏賊が海からたくさん揚がるようなときは鮪も海で餌をたくさん食べるので釣りにかからない、餌にするものが少ないので釣れるのだもの、どうかして今度一遍鮪釣りに行って見たいな」と、釣りの欲は何びともしだいに大きくなる。隠居老人は鯨のために肝腎な話の腰を折られて張合いなく、「鱗次郎さん、さっきのお話はどうでしょう」と、再び話題を開こうとする途端、今度は六、七尺もあろうかと思われるカジキ鮪が船の六、七間先のところに浮き出した。舟人が「しめた」と叫んで、チョキリと名づけている小さな銛を取るが早いか、覘いを定めてエイと一声投げ出した。

一一三　大魚

何事も手練である。この辺の漁師が海へ出るときはいつ大魚に出あうかもしれないので、何漁をする者も常にチョキリを用意してその使用法を練習する。チョキリの投射法は矢の投射法に異ならずしていっそう巧みなるもの、熟練した漁夫がひとたびチョキリをもって魚に向かえば千に一つ射はずすことがない。この舟人もさきにしめたと叫んだだけに、腕に覚えのある剛の者で覘い違わず例のチョキリを大魚の背中へグサと投げ込んだが、魚は驚いて水中に沈み沖を望んで力の限りに奔走する。チョキリの柄に細引ほどの綱があり、綱の先は舟の横木に結ばれているが、魚の力で悉く綱を引き出して

ついに舟をも曳いて行った。驚く隠居「これはたまらん、この勢いで引っ張られては、どこまで舟を持って行くかわからん」。舟人「なに大丈夫です。二時間ばかり曳きずられると、そのうちに魚が弱ります」と平気なもの。魚は苦しさのあまり東西に奔り進路を定めず、舟の行くこと曳船のようである。ややあって魚の力が弱った頃を見計らい、舟人は、綱を手繰って魚を引き寄せ、舟の側まで漸くにして引きつけると、魚は舟を見て急に頭を転じ、再び必死に奔逸する。舟人はそれと同時に綱を伸ばし、また、その弱るに乗じて徐々と引き寄せる、舟の前にくれば魚は必ず引き返す。再三再四、手繰っては伸ばし、伸ばしては手繰り、もはや魚の勢力が衰えたのを見て、舟人は左手に綱を持ちかえ右手に太い棍棒を振りあげ魚の頭を一撃の下に打とうとする。けれども魚はなお荒れに荒れて頭を前面にあらわさず、舟人が身構えて一生懸命「もう一人漁師が乗っていると、私が引き寄せたのを、ほかの人に頭を打って貰うから早いのですけれども、一人だからうまくいきません」。鱗次郎「じゃ僕が打ってやろうか」。舟人「いや、どうしてこの一打がいちばん大切で、打ち損じると魚も死者狂いですから、悪くすると綱を引き切るか私を海へ引き込みます、何でも一打に殺さなくっては」と、暫く加減を量り、やがて忽ち魚の頭も砕けんばかりに打ちおろした。

一撃の下に魚はほとんど昏迷したのを再び三たび打ち続けて「さあ、今度こそ手伝って下さい、綱を引っ張って引き揚げてください」と、鱗次郎とともに七尺大のカジキを舟中へ引き揚げた。ほとんど死んでいる魚ながら舟に揚げられて、一つ二つ跳ねる毎に舟も左右に動揺する。隠居老人は手を打って喜び、「これは珍しい、私も毎度海へ出るがカジキを獲ったのははじめてだ。たいそう口吻の長いものだの」。舟人「素人衆はご存知ありませんが、この口吻は漁師仲間で三円も五円も致します。烏賊釣りの角にこのくらい好いものはありません。東京へ出すときは口吻を折って出します。それにこの魚は土用中でも三日持ちますから、値段も二十円以上いたしましょう。なにしろきょうは大当た

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com